

『ぬばたまの巻』再考（補説）

倉 本 昭

はじめに

私が前号の『ぬばたまの巻』再考で述べたことを最初にまとめておく。

『ぬばたまの巻』（以下『ぬばたま』と略記）冒頭に付けた無腸隠士の序によると、本書は堺の人宗椿の著とされている。また本文の内容は、柿本人麻呂の教示によって、『源氏物語』（以下『源語』）と和歌とについての認識を宗椿が改めるといふものである。しかし、そこで人麻呂によつて語られる『源語』論は明らかに契沖や真淵といった国学者の説の影響下にある。よつて『源語』に一定以上の素養のある読者なら、本書が中世の人である宗椿の著でありえないこと、つまり序が偽りであり、宗椿著は仮託にすぎないことを見抜ける。ところが本書は偽書にしては周到さを欠いている。たとえば契沖『源注拾遺』の表現をふまえた言辭は、宗椿著の偽りであること、を解くきっかけになるだろう。何よりも本書が真淵説の影響下にあることを見抜き、それをヒントに彼の「物語Ⅱそらごと」説を思い出せば、本書の「仕掛け」が判明する。すなわち彼の『伊勢物語古意』に見える説によれば、物語は「そらごと」であり、作者は実名

をあらわさないとされている。とすると作者を仮託する『ぬばたま』も「そらごと」ということになる。ここにそらごとをそらごととの形で語る奇妙な作品『ぬばたま』の姿が浮かび上がる。

『ぬばたま』は物語であると同時に評論書として受け止められてきたが、どちらかというところ、評論書の側面が強調されていた。しかし評論としては、識者の言の通り、新味なく、論に不統一な点も見られ、高い評価を与えられない。それでも一方に「そらごと」としての読みもあるものであり、そちらを看過してはなるまい。そこで私は、国学の十分な素養を持つ読者が、本書の『源語』論に契沖や真淵の影を見いだし、序の偽りを見抜く知的作業に、「そらごと」としての『ぬばたま』の楽しみ方があるのではなからうかとした。さらに『源語』論については、秋成が意図的に諸説から再構成した趣があるという説を提示した。かといって、そこに秋成の『源語』観が反映していることは否定しない。ただ彼は自分の見解をストレートな形で人麻呂に託しているのではなく、そこに多分に作爲的な要素を含ませているということに注意したのである。

しかし残された問題は、『源語』論の部分に、そのような読み方

があつても、本書の後半に語られる和歌史論の部分をどう考えるかである。ここは物語と関係ない以上「そらごと」の仕掛けとは直接関わらない。よつて評論書捉えかたで読みすすめていかざるをえない。それを根拠に、『源語』論の部分も先学諸説の踏襲とはいへ、秋成は彼なりに自分の考えを述べようとしていたのだということもできる。この立場からすれば、『ぬばたま』で人麻呂が説く『源語』論に秋成の一定の作為を見いだす私の考えは認めがたいであろう。そこで私は、人麻呂に語らせた『源語』論が秋成の見解と完全一致をみないことを、別な角度から説いておく必要があると考える。本稿ではまず『ぬばたま』以前にものされ、同様の『源語』論が見える『秋山記』に触れることにする。この作品の『源語』論を検討すること、『ぬばたま』の性格は一層はつきりするであろう。

次に、秋成はそらごとをそらごとと論じていることについて。かつて森山重雄氏は「寓言は秋成の『ぬばたまの記』の文脈のなかでは、やはり物語的な虚構と解すべきであつて、作品のなかに作者が教化主義的に含ました寓意と解すべきではない」と指摘している（『国文学解釈と教材の研究』第四巻七号「秋成研究の現段階と問題点」昭和三四年五月）。また高田衛氏は「この寓言（そらごと）の二重性は、論理化できる次元のものか、どうか」とコメントしている（『日本文学』第十三巻一号中村博保氏「秋成の物語論」の討論要旨）。つまり寓言はそらごとであり、そらごとに「あだ物」「いつわり言」の意味があるとされるから、『ぬばたま』という「そらごと」の中で語られることも「あだ物」「いつわり言」になりえるのではないか。さらに言うなれば、寓言はそらごととあだ物・いつわり言

という図式自体も真剣に受け取れるものかどうか。高田氏の言は、そういつた疑問を表すのである。かかる懐疑的な見方を徹底させるなら『ぬばたま』は全くとらえどころがなくなってしまうし、秋成の寓意も結局読解不能ということになりかねない。しかし『ぬばたま』が評論としての体裁をも備えている以上、そこに秋成の訴えんとする何らかの趣意が含まれているはずである。それを明らかにした上で、なぜ秋成が「そらごと」の二重性という形でしか『源語』を論じられなかったかをも説明しなければならぬ。それは先に触れたこと、つまり、『ぬばたま』の『源語』論が秋成の見解と必ずしもイコールではなかったということも関わってくるはずである。

1

『藤篋冊子』巻三に載る「秋山記」は安永八年九月十二日から十月にわたつて行われた秋成の城崎への湯治旅行がもとになった紀行文である。一方『ぬばたま』は、序によれば、同旅行で泊まった宿で隣客から見せられた本だということになっている。これら二つの作品が近い関係にあるのは、同じ旅がきっかけになったことのみならず、同じ趣意の『源語』論が見られることからわかる。「秋山記」には、秋成夫婦が須磨の浦で旅の法師に『源語』論を聞く場面がある。今さらの感があるけれども、一応法師の趣意をまとめてみる。

- 1、「言のあやに妙なる、心ばへの巧なる」点では『源語』は和漢無双の傑作である。

- 2、しかし真剣に読んで「何のやくなきいたづら文」である。こ

れを読む効用を強いて言えば、兩夜の品定めに「大かたの人の心のくま、名残なくあなぐり出」すので、反面教師的な意味で読者の戒めとなることである。

3、光源氏、桐壺帝、夕霧などは性格や行動において倫理にもとる点がある。これは紫式部が「め、しきほん性」をもつて書いたゆえである。

4、藤原為時の加筆を想定したり、儒仏の教えに附会して説くのは「もつこ、ろにもあらぬ私言」であり、誤りである。

5、紫式部は「あとなしごとゆゑくしく作り出たるむくひに」墮獄した。

これらは全て『ぬばたま』で人麻呂が説く論にも見えることであり、両者の表現の類似は、一々細かく挙げていくときりがないので省略したい。

これに対し紀行文中の秋成は『源語』教戒書説に立つ。以下を見たい。

「只今の御さとしこそ、世に珍らしくも承り侍れ。されば彼物かたりは、仏の教のたふときにも、むねおのづからかよひ、うつ、の世にも、かしこきいましめと成ぬるよし、昔の人々のろうじおきてつるを、いかさまにおぼしわきて、かうまでくだし給ふらむ」

この文中の秋成の姿は、もちろん『ぬばたま』の宗樁に重なることになる。簡単に図式化すると次の通りである。

『秋山紀』	法師	『源語』批判
『ぬばたま』	人麻呂	『源語』賞賛
		秋成
		宗樁

しかし如上の意見を持つていた作中の秋成は、法師の啓蒙の結果、「猶しりへに立てゆかまほしく、ことゝひまなぶべき法師なりけり」と、考えをあらためようとしている感がある。

『秋山記』に関して、研究者は『源語』批判派の法師に秋成の自己投影を見てきた。これは同時に、須磨での秋成と法師とのエピソード自体が虚構にすぎないことを意味する。つまり自己投影とは、秋成が自己の抱く『源語』論を法師に託して述べたという意味においていうのである。このうちエピソードが虚構であるとの意見には私も全面的に従うことにする。ところで法師に作者の自己を投影したことが、いかなる意味を有するか。古く島津久基氏は『紫式部の芸術を憶ふ』の「官長と秋成」(要書房、昭和二四)において「秋成の心内にある旧き心と新しき心との闘争であり、源語への感賞礼讃と不満反感との撞着の表白である」とする。これを受けた森山重雄氏は『秋成 言葉の辺境と異界』の「秋山記」を読む(三一書房、平成一)で「自己」を他者に投影することによって、もう一人の自己、他者化した自己があらわれてくるのだ。この自己を他者に投影させたものが、この法師である。」とする。また「秋成が法師に託した言葉の中には、世を挙げて源語を賞讃することへの反撥と、かつて源語を耽読し夢中になった自己への嫌悪をみてとるべきかも

「しれない」と述べ、先に引いた「猶しりへに立て」云々の言葉の中に、島津氏云うところの「自己鬭争」の面影をかいまみている。次に美山靖氏の考えは前の図式と異なつて、法師を「秋成の分身」と「宗椿」の合体」と見る（『秋成の歴史小説とその周辺』第三章「歴史と物語と人間」と中の「ぬばたまの巻」について） 漬文堂 平成五。それでも法師の中に秋成の影を見ている点では前二者と共通している。

このような考えを認める前に、「秋山記」の須磨でのエピソードで相手を僧形にしたわけは、そもそも何なのかを検討したい。

秋成が旅行中実際にモデルとなる僧にであつたかどうかはわからない。それよりも謡曲のワキ僧にヒントを得た可能性がある。ただ『源語』論の部分において、語りは法師の独壇場であるゆえ、むしろ法師がシテ、秋成がワキという方がよい。謡曲では精霊であるシテからワキが知識を授かるパターンがあるが、「秋山記」の法師はワキらしくないのみならず、靈妙な存在でもない。これが「ぬばたま」になると、ワキの宗椿（僧形）、シテの人麻呂（和歌の神）というように能のパターンにきれいに当てはまる。秋成は「秋山記」執筆の際、『ぬばたま』の時ほど謡曲の形式にとらわれているわけでもなさそうである。

私はしばらく謡曲を離れて法師の別のモデルを詮索してみたい。

冒頭にまとめた法師の『源語』論の3は、前号で触れたように契沖「源注拾遺」の踏襲である。人物一人一人を挙げて、その欠点をあげつらう筆法は「源注拾遺」独特のものであり、秋成は意識的にこの筆法をまねている。これは法師が契沖阿闍梨を彷彿とさせるよう

にとの配慮ではないか。秋成が契沖の著で独学に励んだことは『胆大小心録』（中公版全集では5番）の記述から周知の事実である。契沖は彼の『源語』研究にとつても大きな存在であつたはずである。もちろん法師の論には契沖説の影響のみが認められるのではない。中世から行われてきた教戒書説を否定する説として、契沖や熊沢蕃山、安藤為章の説を適宜取り入れたものである。だが中でも契沖は定家の「詞歌言葉を翫ぶべし」という言を引き、「反教戒書説派としては急先鋒に立つ。別の形で教戒になりえる寓意を読む為章や真淵と違い、契沖説は『源語』を皮相的な価値しかもたぬ文学におとしめる危険さえあるからだ。それだけに儒仏の価値観に附会して読む説を反駁する役には最もふさわしい人でもあつた。

以上から、私は次のように考えたい。契沖を初めとする学者の新しい源氏学、それとの出会いを謡曲風に虚構化したのが、「秋山記」の法師との出会いの場面であると。よつて法師の説は秋成の『源語』観をストレートに生の形で伝えたものではなからう。ここに秋成の考えが反映していても、それがどこまでであつたか正確にはわからない。たとえば「式部は石山の仏のへん化也と、いとくるはしきまでほめなせるを聞けば、おのがかしこむみちのあなひにもやと、あたら眼をついえたるが、今はとりかへさまほしき年月なりけり」「さばかり心いりてよむとも、何のやくなきいたづら文なり」という言は秋成の真意から書かれたとは思えないのである。『雨月物語』に見られる『源語』の影響は常識であり、晩年には『源語』巻名の題詠五十四首和歌がある。そのほか美山靖氏の「源氏物語」と上田秋成（前記書所収）に秋成と『源語』との関係がまとめられて

いる。これによっても、秋成は生涯を通じて『源語』を愛好しつづけたと考える方が自然である。だから『源語』を一蹴してしまう法師の如き意識は秋成になかったと思える。

また秋成が本当に『源語』の価値をおとしめたかったのなら、素直に作中の自己に語らせればよかつたではないか。謡曲的な形にこだわるなら、『源語』賞賛者であるワキ僧を自分が啓蒙する形でもよかつた。自分は批判的見解をもちながら、作中の自己を『源語』賞賛者に仕立てるといふのは不自然であり、倒錯的である。

法師に秋成の自己投影を見る説は多いが、作中の秋成にも勿論自己投影があることを忘れてはなるまい。作中では更に詳しいことを問い学びたいとあるが、それは幾分不審を残しているからであり、法師の説に完全に従つたわけではないとされる。しかし「秋山記」執筆当時、『源語』が儒仏の戒書の書であり、ありがたいものであるという風に、作者秋成が実際に考えていたとは思えない。秋成が『源語』戒書説派であつたなら、旅の僧に啓蒙されるというようなエピソードを書かず、むしろ批判論を駁するという虚構を考えるのが当然である。いかに駁するか。たとえば安藤為章流に「みな其世にありし人のうへを述て、勸善懲惡をふくみたり。此本意を知らずして、誨淫の書とみるともがらは、無下の事なり。又詞歌言葉のみもてあそぶ人は、劍の利鈍をいはずして、たゞ柄室の鏝りを論ずることし」（紫家七論）より。岩波日本思想体系『近世神道論前期国学』を使用）などと主張することができよう。

結局「秋山記」の秋成は戒書説を割り当てられているのであり、実際の彼がそいつた考えを持っていたのではない。それでも、と

ぬばたまの巻』再考(補説)

にかく自分を賞賛者として描いたのは、『源語』愛好の心があつたからこそである。よつて彼は自己の『源語』に対するアンヴィバレントな意識―賞賛の心と嫌惡感の対立―から須磨でのエピソードを仕立てたのではなからう。それは契沖らの説が中世の『源語』戒書説を改めてゆくことの寓話であり、契沖以降の学者の『源語』研究と秋成との出会いを象徴的に表すものと考えるのがよいと思う。法師と作中の秋成は、仕立てられた演劇的筋立ての中で、それぞれの役割を担っているのであり、そこから作者の見解を直接引き出すとしても限界がある。よつて私は「秋山記」の須磨のエピソードに「自己闘争」といつた強い緊張感をほらむ要素を讀みとらない。また法師に秋成の自己投影が認められるという意見に対しては、法師の見解に秋成の『源語』観が幾分反映しているという意味において、そういう考え方も正しいと思う。しかし私は法師に秋成が私淑した契沖の影をこそ見たい。

2

「秋山記」の須磨のエピソードは『ぬばたまの巻』へと発展する。その際、秋成と法師は、宗樞法師と人麻呂の組み合わせに変えられた。秋成と法師が担っていた役割、戒書説と反戒書説の対立の構図は、そのまま宗樞と人麻呂に受けつがれる。反戒書説に立つ人麻呂の論は法師より詳しく緻密になっているが、趣旨はそのままである。よつて法師の意見が作者秋成のそれと全くのイコールでないように、人麻呂の意見にも秋成の實際抱いていたであろう『源語』観と微妙にずれる点がある。

それにしてなぜ宗椿と人麻呂なのか。『源語』を教戒の書と見、礼讃する役割として、この物語を多く筆写した逸話を伝える人物宗椿はうってつけであった。しかし反教戒書説の持ち主として人麻呂が選ばれる必然性は少ない。ただ城崎旅行が行われる年の前後に秋成は人麻呂に関する考証をしていたと見られる。そのことと人麻呂の人選とは当然密接な関係がある。また舞台が須磨から明石に変わっているが、明石は光源氏とのつながりと同時に、「ほのほの明石の浦」の歌で人麻呂とも縁の深い土地である。秋成も城崎湯治の折、おとずれた場所であった。ワキ僧の宗椿が出会う土地の神靈(シテ)としても、明石の柿本社に祀られる人麻呂は格好の存在である。結果、謡曲を彷彿とさせる人物構成は「秋山記」より明確になった。このように法師に代わる人物として人麻呂があがったから、古代史論や和歌論までが組上りのぼったか、逆に、それらを論じたいがために人麻呂を選んだかはわからない。とにかく人麻呂を持ち出して好都合になる理由はいくつかあったわけである。

ところが『ぬばたま』は『源語』論をそのまま物語一般論にすりかえているし、今言ったように、筆の勢いにまかせて、「おのづかなるやまと魂」を失う歴史的過程、記紀歌謡以来の和歌の意義と歴史を述べている。それは純粹に『源語』論を求める眼からは一見あらずもがなの部分である。しかしこれらが作品全体のバランスから考えても少なからぬ分量を示すことに注意したい。作者は序文で「ぬばたま」の著者を『源語』マニア宗椿としているし、舞台は明石浦、話題が『源語』から始まっているから、『源語』論を中心に考えていたことは確かである。我々は、そこから話題が逸脱していったと

考えるか、物語論を補強するものとして史論や歌論を説くに及んだと考えるかである。もちろん後者の可能性をまずは探るのが建設的であろう。

人麻呂によれば、物語を含む「書(ふみ)」は中国の聖人の教えを濫賜とする。ところが「国采え、人の心花にのみうつりゆきては、事はたくみに、詞はあやに、かれにまつはされ、是にねぢけつ、あふさざるさに事立て、書は憤りより書もするものにいふよ」とある。日本人は華美を好む心とさかしさを募らせ、その副産物として物語を創りだした。よって物語自体が「世の人の目をよるこぼしむるさかしわざ」であり、それが作者個人の憤りに基づく以上、万人を等しく導くモラルの発揚を作り手は意図していない。よって「しひては何ばかりの益なきいたづら言」なのである。また儒仏二教からくるモラルそのものが、自然的存在としての人間を人為的にゆがめ、古代人の「おのづからなるやまと魂」を疲弊させた元凶にほかならない。このように歴史の流れを眺める中で、物語教戒書説を支えるモラルの価値そのものを相対化し、論に説得力をもたせている。歌論は、上代の歌が人為的モラルとは無縁の所から生まれたことを説くもので、上代の歌を物語より上位に置くことで、相対的に物語の価値を低からしめている。このように史論、歌論も物語論に寄与していることは否めない。しかし物語論を超えて全体から浮かび上がる問題があるのではなからうか。それを以下に見ていきたい。

書を書くのは具体的には博士なり法師のだが、彼らは「異の国に立たる法どもをうらやみて、とりもちひさせ」た者たちでもある。だから「やまと魂」は見失っている。そういった人々が「螢の巻に

いへる、日本紀などはたゞ片そぼざかしと書たるを見て、彼紀は、をしへの為に撰ばれし物とするより、さま／＼なることわりどもを附会せつゝ、いふ。つまり物語を読んでは曲解していくのである。

ここで「附会せ」とあるのは、具体的には『源語』を教戒書とみなすことをいう。人麻呂は附会について「ふかきに過ぎ、さかしらにふけりて、とさまかうさまにもてつけていふ」とも云うから、これは「さかしら」であるといえる。

また人麻呂は神代の事蹟を自分たちに都合よく解釈する神道家をも同様に非難する。

「巫祝の徒は、神代のふることも、しひたることわりをそへ、其旨を秘めつ、おしいたゞけど、其いふは、皆かんざびたる世の古言にくらく、儒仏陰陽わきなく取られて、浅はかなる事どものみぞかし」

歌論の部分でも

「花にのみうつりゆく心より、いにしへの歌のこと葉を、おのが好むかたに引なほしつゝ、かくぞありたきなどさかしらするほどに、歌のしらべのよしあしはとまれかくまれ、よめる人のこゝろならぬものにさへあらたむるは、いかにむくつけきしわざぞや。又このことわり歌のみにあらず。やまともろこしのふみとく人の、常にこゝろとすべき事也けり」

とある。よつて物語と史論、歌論の三者に一貫する問題として「知識人のさかしら」が指摘できそうである。

「さかしら」の語こそ見えないが、「秋山記」の法師の論にも「ぬばたま」と同様の見解が述べられる。

ぬばたまの巻』再考(補説)

「道々の文のことわりとく人は、あながちにも其旨深からんとては、とさまかうさまにもてつけていひしらふほどに、はて／＼は、もどつこゝろにもあらぬ私言をさへとりはやす也」

「おほよそよろづのことも、私ごともてことわりなさむには、あやしうひがめる心も、直くまめ／＼しく取なすべかめり」

引用部の趣旨は、知識人の悪しき弊として附会・曲解を指摘する『ぬばたま』の説と同じである。よつて「秋山記」にいう「私ごともてことわりなさむ」とは「さかしらする」ことと明らかに同意である。となると『ぬばたま』全体に一貫するとみたテーマは既に「秋山記」の中に兆していたことになる。また「私言」は後に宣長と日の神論争でよく問題にされる「私」と一脈通じるものがある。だから「さかしら」「私言」が、「秋山記」「ぬばたま」を通じて作者の問題意識に上つていたと考えることは決して見当違いではなからう。

3

人麻呂は物語に作者の寓意を認めている。それには時に「世のさまのあだめくを悲しび、或は国のついでをなげく」意もある。そういったものなら社会批判という意味で何らかの教戒となりえるはずであるが、時勢のいかんともすべからざるを思い、為政者の目を憚つて、「いにしへの事にとりなし、今のうつつ、を打かすめつゝ、おほろげに書出たる物」であることが問題となる。臆化の手法は「ざえある人のしわざ」で、「ふかくはかり、遠くおもひやりて、つくり出」るものだから、読者は作者の寓意を簡単には読み取れない。容易に

読めては臚化の意味がないのである。作者がこのように意を用いる点を指して人麻呂は「さかしわざ」と呼ぶ。物語はこの臚化の作業によって内容的に「あだ言（あだ物）」、「いたづら言」となるのである。その奥に読み得た寓意は読者の「さかしら」なり「附会」にすぎない。ならば作者の寓意はまさに作者自身によって明らかとされるしか正確に知る方法がなからう。それは不可能だから、物語の読者は永遠に正しい寓意を読めないことになる。残された道の一つは、美詞や趣向の面白さを堪能し、皮相な鑑賞に甘んじること。もう一つはあくまで読者個人が読み得たものとして教戒性を認めることである。後者について『源語』の場合を見てみる。

「しひて是よまん心しらびをもとめば、男も女も、世にある人のうへをかたり出たるが、おほよそ隠る、くまなくあなぐり出しかば、よむ人おのれ／＼がきたなき心ねを書あらはされて、今よりをつ、しむべきいましめともなりなまし」

この作品を読んだ読者は登場人物と重ね合わせて自照し、欠点を改める。これは読者それぞれの読みと反省にかかってくるから、その人ごとにとつての教戒にすぎない。決して普遍性をもった万人への教戒ではない。よって『源語』を儒仏二教とからめて解くのは学者のさかしらに過ぎず、誤っている。

いま一応の筋が通るよう適宜説明を補いながら、人麻呂の物語論を筆者なりに整理してみた。秋成の考えが、これとどの程度のレベルで一致するか、正確なところはわからない。ただ「さかしら」が問題意識にあることは確からしいから、学者が『源語』に「さかしら」を加え、曲解してきたという考えは、彼が実際もっていたもの

であろうと推測できる。しかし学者の附会を弾劾してみたところで、その先には、紫式部のこめた正しい寓意が後代から読めるのかという究極の問題が横たわる。結局のところ「さかしら」に陥らないようにするなら、『源語』はまさに「詞歌言葉を配ぶ」よりほかない。彼はそういう意味で、為章や真淵に批判されたところの契沖説に理解を示していたのかもしれない。しかしそれでは何の発展性もなく、清新な『源語』論を生み出すことは不可能である。

中世から連続と続いた源氏学はさかしらにさかしらを重ねてきた。しかし作者のこめた寓意が臚化の業に妨げられて見えない以上、秋成とて『源語』の大意に関しては「さかしら」しか語れないのである。儒仏二教のモラルに附会することに否を唱えるだけで、それに代わる大意は語れない——そんな評論は『源注拾遺』に対し屋上屋を重ねるだけで意味をなさない。こうして壁に突き当たった末に、彼は自己の問題意識を虚構の中で語る手法に思い至ったのではない。秋成は『源語』にまつわる対話を仮構し、その中で中世の学者の「さかしら」を弾劾することにした。そして光源氏にゆかりのある須磨明石に立ち寄った旅の記をつづるに際し、秋成は仮構された対話を須磨でのエピソードとして配した。こうしてできた「秋山記」の須磨でのエピソードは、先に書いた通り、契沖ら、いわゆる国学者の源氏学との出会いの虚構化、または中世の『源語』観が契沖以降の学者によって改められていくことの寓話という風にとれる。だから、このエピソードそのものが十分作作的な「さかしわざ」なのである。またエピソードの形は夢幻能の形式を意識したものであった。これは『雨月物語』『白峰』『貧福論』で既に試みていた形であ

る。そして対話形式の『源語』論は熊沢蕃山が『三輪物語』巻五で試みていた。

しかし『秋山記』を読んだ読者は、普通これを紀行文として読むであろう。『ぬばたま』を読んだ者でないとならば法師との出会いが虚構であることには中々気づかない。だから法師の論は法師の論として捉えられる。もし読者がこの論に異を唱えようとしても、咎は法師に負わせられる。一方、作中の秋成は、中世の学者の權威にかこつけられるかのような言いぶりで教戒書説に触れるものの、聞き役だから、読者に指弾される危険性はない。このように読者の褒貶を免れようと工夫する姿勢は物語に通ずる。

ただ、あくまで物語論は紀行中の一エピソードに紛らせてある。だから『秋山記』全体のバランスから考えてもあまり長大な論議はできない。秋成は『秋山記』須磨の段の形式を發展させて、さらに詳しく多岐にわたる論議を展開させることにした。このとき彼は物語ⅡそらごとⅡ寓言という図式に対し、かなり意識的であったのではないか。法師と秋成との対話を紀行文でなく「物語」の形式に収めれば、もっと自由な展開が可能だし、物語の内容は「そらごと」「あだ言」「いたづら言」と定義付けられるのだから、何を言っても咎を被るには及ばない。しかし対話編をいかに物語とするか。真淵によれば、物語は他人に仮託するものであり、実作者を明らかにしないものという。秋成はそれにのっとって、新しい作品を中世の『源語』マニア宗椿の著作ということにした。さらに、宗椿作が仮託にすぎないとわかるようなヒントを設けるため、人麻呂のセリフに契沖はおろか真淵の説まで、それとわかるように用いたのである。

ぬばたまの巻』再考(補説)

このことを見抜く過程で読者は知的興味を得られること、前号で述べた通りである。また、人麻呂の説は『秋山記』の法師の説の發展したものであるがゆえに、やはり国学者の『源語』論の典型としての意味をもち、宗椿の『源語』教戒書説に對置されている。この人麻呂の『源語』論は多くの部分で秋成の持論と一致すると思われる。しかし、その論は秋成の一定の作為のもとに構成された「さかしわざ」でもある。そういうものに対して、作者自身、絶対的な価値をおいていたとは思えない。秋成が『ぬばたま』の内容を「そらごと」として無価値化できるようにした理由は、ここにもある。

秋成の著作は中央公論社版全集を使用した。なお『秋山記』の虚構性に関して、正本綏子氏による「『秋山記』冒頭における『伊勢物語』第一六段踏襲の意図」(『国文学攷』第一五七号 平成十四年三月)が発表された。また飯倉洋一氏は「人麿・宗椿・無腸」『ぬばたまの巻』の言説構造」(『富士フェニックス論叢 中村博保教授追悼特別号 平成十年十一月)で、特に『ぬばたまの巻』傍注の問題に注目し、傍注が新しいテキストを生成するという複雑な構造を解き明かした。二つとも『ぬばたま』を考える上で大変有意義な論考と思うので、特に注記するものである。